



上・清水建設による耐震補強後の、西新井大師山門内部。既存の木造部分への影響を最小限に抑えた位置に鉄骨構造を新設し接続することで耐震性を高めた。下・西新井大師山門の保存修理と耐震工事では、境内側に新たな基礎を設置し、曳家(水平移動)することで、門前の拡張整備も実現した(2点撮影・NARU建築写真事務所 中塚雅晴)

大手ゼネコンで唯一、社寺建築の専門部署を持つ清水建設。宮大工であった初代清水喜助以来、国宝ふくめ数多くの社寺・文化財の保存修理、耐震工事を手がけてきた。そこには数百年にわたり継承される伝統技術と、清水が誇る最新技術が注がれている。社寺建築のエキスパートに聞いた。

清水建設株式会社

社寺建築に注がれる、匠の技と最新技術。

社寺建築住宅部工長
沼田 穰
Yusaku Nunata



沼田穰さんは寺社だけでなく、銀座歌舞伎座建て替え計画の低層棟外装など、伝統に新技術を投入した鉄骨造にも携わった

佐々木 聖文
text by Kiyoshi Sasaki
photographs by Shinsuke Oda



西新井大師 總持寺

東

京都足立区指定の有形文化財で、開創千二百年を迎える西新井大師總持寺の「山門」。百八十年の歴史を刻む、総ケヤキ、二層造りの豪壮な楼門だ。その保存修理と耐震改修工事が二〇一八年に竣工した。請け負ったのは清水建設だ。

「古くからの木造部分に干渉しない位置に鉄骨フレームを組み上げ、耐震補強しています」と話すのは社寺建築・住宅部工長の沼田穰さん(四十四)。「伝統木造の自重で安定している垂直方向は拘束せず、地震時には木梁を両側から挟み込んで水平力を負担し、横揺れを抑制する『縦滑り嵌合継手』という方法を新たに考案し採用しました」。外からは見えな

る。清水建設の社寺建築のノウハウが凝縮された好例だ。

沼田さんは十年前に西新井大師本堂の免震工事を手がけて以来、境内のさまざまな整備に携わってきた。「文化財は、年月の積み重ねに耐えた結果や、創建当初の人びとの思いが、建造物の細部から感じられる」ところに仕事の醍醐味を感じるといふ。

三十代のとき重要文化財の法華経寺祖師堂の保存修理に従事して以来、文化財の社寺に一貫して携わってきたのが主査の金久保仁さん(六十三)。これまで本殿遷座に合わせ六十年ぶりに実施された出雲大社(国宝)の保存修理など、十を越す文化財の仕事に関わってきた。社内で数

名しか授与されていない「伝統技術継承者」に認定されたエキスパートである。出雲大社の事業では沼田さんの指導にもあたり、師弟関係が築かれている。金久保さんは伝統建築の修復の意義を「先人たちの対話」と表現する。「例えば仕口(木の合わせ目)でも、昔はポルトなどないですから、叩いて締め込めるよう、勾配つきの木の加工によって工夫してあるのです。そうした寸法には表れない、先人たちのいいいな仕事を目の当たりにすると、自分たちも将来の人たちが見て恥ずかしくない仕事を残さなければと気が引き締まります」。伝統建築の優れた手技を保存維持するためには、将来の技術革新を視野に入れる「可逆性」も重要だと金久保さんはい

う。「西新井大師山門でいえば、さらに良い耐震補強の方法が考案されたときのことを考え、今の鉄骨フレームを外せるようにしてあります」。技術技能の継承は、現場が第一だ。多人数が関わるビル建築などと違い、社寺建築の多くは数名の社員で施工することが多い。若手でもプロジェクト全般を見渡せる。「施主さんとの距離が近いので思いがじかに伝わり、建物に反映しやすい」(金久保さん)。仕事の勘所を早くつかめるのだろう。

旧渋沢邸を移築・復元——二代喜助の仕事に学ぶ好機。

江戸城西の丸造営などに大工として参加した初代清水喜助を創業者とする清水建設に、社寺建築の遺伝子は連綿と引き継がれる。増上寺、池上本門寺、浅草寺などこれまで清水建設が関わった社寺は数知れない。また、二代清水喜助が明治期に手がけた渋沢栄一郎が、その後増改築を経て、旧渋沢邸として二〇二三年に東京都江東区に開設予定の潮見イノベーションセンター敷地内に移築され、百四十年ぶりに、里帰りする。「その解体・移築を通して、喜助の仕事が見られる」。これも継承の場」と話す金久保さんが、宮大工の故・西岡常一棟梁の口伝から学び胸に刻む言葉がある。「建物は木組、木組は人組、人を組むは心を組む」。伝統建築を保存継承する清水建設の技と心も、未来へ受け渡されていく。



社寺建築住宅部主査
金久保 仁
Hiroshi Kanai

金久保仁さんは社内で4名認定された「伝統技術継承者」のひとり。浅草寺、靖国神社、池上本門寺など、さまざまな社寺の保存修理工事を率いた文化財・伝統建築のエキスパート



上・旧渋沢邸。二代清水喜助が手がけ、深川区福住町(現在の江東区永代)で1878年に竣工。1991年から青森県六戸町に保存されていたが、清水建設が譲り受けた。2万点を超す部材を解体・収去のうえ、2023年までに江東区に移築復元する。渋沢栄一は、相談役として清水店の経営指導にあたるなど、清水建設と深い縁がある。右・日光東照宮などで腕を磨いた初代清水喜助が、1804年、21歳のとき、神田鍛冶町に大工業を開業。社寺建築は清水建設の祖業だ(2点提供・清水建設)

